

かわだんぎ  
川談義(6)

北上川「流域圏」フォーラム実行委員会

第6号

令和7年2月

父 軽石昇

軽石 真央  
( ガイア展勝の会 )

「命がけて展勝地を守ります！」

それは、父が公の場で発した最後の言葉でした。  
パーキンソン病を患っていた父は、最後の最後まで展勝地、北上川を思い続けました。  
闘病中も夢の中で会議をしているかのように寝言で誰かに指示を出し、「それは違う！」と叫ぶこともありました。父は最後まで展勝地を守ろうとしていました。

(株)展勝地の社長になってからの父は、もはや私たち家族だけの軽石昇ではありませんでした。社長になる前、八百屋を営んでいた父はいつも一緒でしたが、ある日から展勝地で社長をすると言い、八百屋の親父から社長へと変わりました。当時の私には、突然見知らぬ人になったように感じられ、寂しくて辛かったです。反抗期も重なり、私は反抗し続けました。家出や補導、朝帰りを繰り返し、その度に父との衝突がありました。

高校卒業後、レストハウスに就職させてもらいましたが、仕事の日に朝帰りして謹慎となり、そのまま東京に出ました。

東京にいる間も連絡を取るのは母だけで、正月に帰ってもすれ違いが続きました。父が東京に来るたびに「今から来い」と言われても会うのは数回だけでした。

毎年、自分で詰めたりんごを送ってくれ、りんごの箱には原風景の冊子やひらた船や展勝地に関連する写真や資料、雑誌、新聞などが同梱され、段ボールのふたの裏にはマジックで殴り書きされた字で「頑張れ！真央！負けるな！真央！」「皆、元気です。お前も頑張れ！」などの励ましの言葉が毎回ありました。

父から逃げて東京に行ってから12年が経ち、私はうつ状態と診断され、東京に残るか北上に帰るか悩んでいました。

東京と北上を行き来する間、父は駅までいつも北上川沿いを車で送ってくれました。

ある日、珊瑚橋という橋を曲がった瞬間、夕日で真っ赤に染まった北上川の景色が飛び込んできてラジオからエディット・ピアフの愛の賛歌が流れ出し、その光景と曲との組み合わせがあ

まりにも美しく圧倒され、今まで押し殺してた思いが押し出されるような気持ちになり私は号泣してしまいました。

その時、ずっと無言だった父が「もう充分頑張ったべ。もう良いんじゃないか？」と言ってくれ、私は北上に帰ることを決めました。

北上に帰ってからの5年間、引きこもりながら療養していた私に、毎朝父が会社に行く前に広告の紙の裏に「おはよう！真央！今日も天気だ！」「おはよう！真央。今日の調子はどうだ？寒いけれど、父さんは仕事、頑張ってくる！」などメッセージを残してくれました。そして毎日30分～1時間、忙しい仕事の空いた時間を作って、ドライブに連れて行ってくれ、そのドライブはいつも北上川沿いでした。

父と川を見ながら、たくさん話をしました。父は、川を見ながらひらた船を走らせた時の事、川と共に生きる全国大会の話、そこで起きた色々な出会いの話、思い出話をしながら人生は面白いし、出会いはありがたいといつも言っていました。

「今は辛く悲しくて絶望しているかもしれないが、お前にもきっといつかそんな感動の出会いがある。」と励ましてくれました。

ある朝は、白百合がいっぱい咲いている景色を見せたいと言い、陣ヶ丘に連れて行かれました。見終わった後、陣ヶ丘の岩頭に柵を乗り越えて「北上川と和賀川の合流地点を見下ろしながら深呼吸すると気持ち良いぞ」と言って、謎のポーズで深呼吸をしていました。

なぜか、1月1日元旦には朝早く、必ず北上川の写真を撮りに北上川に行っていました。

パーキンソン病の時の父のリハビリも川沿いでした。散歩の時もあれば、ドライブの時もあり、今度は、私が運転をして川沿いを走っていました。

ドライブの時も「ひらた船が走ってる横の道をランクルで走って、俺は弁当運び。」

ニカッと笑いながら嬉しそうに得意げに何回も言うのです。

私の祖母、父のお母さんも桜並木の川沿いを散歩している人でした。

ここを散歩すると昇に会える時があるからと、祖母がレストハウスに向かう父に会えるのを待つために座る石がありました。

リハビリもその道でその話をするとその石を目標にしてリハビリをしていました。

肺結核を患って傷心だった父が療養したのは展勝地、うつ状態を患って傷心だった私が療養したのも展勝地。

私と父は「展勝地は【再生の場所】でもあるね。」と話していました。

「何度でもやり直せる。いつだってやり直せる。その事にお前が気づくかどうかだ。

展勝地は、自分があらゆるものに生かされてることに気づける場所なんだ。北上川の川っぺりに寝ころびながら川の音を聞いてると自分は、宇宙からしたらゴミみてえな存在だと思える。思い上がるから苦しいんだよ。全てに生かされてるとお前が知った時、きつと大丈夫だ」

父は自分を愛し、同じように私たち家族を愛し、人間を愛し、その愛が広がって展勝地、北上川、北上、岩手、日本、世界、宇宙まで愛を広げ、平和を心の中から本気で願い信じてきたんだと今は思います。そしてその愛は、たくさんの人たちに返り、家族に返り、自分に返ると信じてんだと今は思います。

「宇宙に包まれているんだね、わたしたち」父が展勝地に行く直前にデザインアダムスさんをはじめとする方々と作った風呂敷の1文を今、思い出します。

父の眠るお墓には「恩」という文字が刻まれています。

そして、「無何有ノ郷ニ遊ブ」と刻まれています。

何故、この言葉を選んだのかと聞いた時、長くなるから後でなと言われたまま聞かないでしまいました。

改めて調べてみると、「恩」という文字の意味は、一般的には「めぐむ。なさをかける。

受けた方でありがたくおもうべき行為。」とあります。

仏教においては、「他者から受ける恵み」や「他人をおもいやることを意味して」とありました。

「無何有ノ郷ニ遊ブ」は「無何有ノ郷（むかゆうきょう・むかうのきょう）」は、【「莊子」応帝王】から「自然のままに何の作為もない理想郷。」

そして、父は「100通りの仕合せ」とよく言っていました。仏教では、すべてがつながり合い、かかわり合う中で生かされており、その出会いに気づくことこそが喜びであり、「しあわせ」の意味であると教えてくれました。父は展勝地でのたくさんの出会い、北上川流域交流でのたくさんの方々との共有体験でその喜びを深く感じていたのだと思います。

「先人たちが残してくれたこの展勝地に、北上川に、歴史と自然と景色とこの場所での出会いに俺らは生かされている。そのことを忘れてはいけない。そのことを伝えていく事が俺たちの

役目だと思う。」といつも言っていました。

父がこの「恩」「無何有ノ郷ニ遊ブ」という言葉をお墓に刻むと決めた時、あらゆる人の顔、風景、思い出がたくさんたくさん思い浮んでいたと思います。

「展勝地・北上川」と言う無何有ノ郷で生かされてきた事へのあらゆる全ての存在に対する「恩」。

そして、願ったと思います。

この先、自分がたくさんのお出会で経験したこの素晴らしい感動を時代が変わってもきっとたくさんの人たちが感じてくれるながらこの北上川が、展勝地が、気づきや発見があってくれる場所であってくれることを、100通りの仕合せがある場所として未来に残っていく事を願いお墓に刻んだのだと私は思います。

北上川を通じて、たくさんの色んな職種、年齢、性別、を超えて仲間になった皆様と出会い、展勝地から石巻までひらた船を走らせた事、過去、現在、未来の自然と人間の在り方をたくさん議論をして、お酒を酌み交わし、感動を共有できたこと、それ自体が川の持つ力は物質的なことだけではなく、精神的な豊かさをもたらしてくれるという事を体現し、経験できたことは父の宝物だったと思います。

この川談義を書かせて頂き、改めて父との事を思い出させていただき、向き合わせて頂きました。自分に絶望してうつ状態になり展勝地、北上川に帰ってきた私はいまだに再生途中です。ですが、フォーラムや研修会に参加させて頂き、父の皆様がどのように活動されてきたかをお聞きしたり、感じたり学ばせて頂きながら、更にこのような機会をつくって頂いたことでまた、私の再生に繋がっております。

「お前にもきつといつかそんな感動の出会いがある。」父が感動した出会いが今、こうして私を改めて導いてくれる事を経験させていただいております。

これからも皆さまに教えて頂きながら、先人たちの思いを未来につないでいく事をしっかりと胸に刻んでいきたいと改めて思っております。

この場をお借りしましてこれからも何卒、ご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。

「おもせえーな」

そう言って、今でも父は先人たちと北上川を眺め、展勝地を歩きながら笑顔でそう言ってる気がします。

手でカッコー、カッコーと吹きながら。